曾野綾子作品選集 10

爽やかな声

桃源社

〈検印省略〉

曾野綾子作品選集 10

爽やかな声　　定価 八五〇円

著者　曾野綾子

昭和五十年三月二十日　印刷

昭和五十年三月二十五日　発行

発行者　矢貴東司

印刷所　太平印刷社

発行所　東京都中央区日本橋蠣殻町一丁目
十二番地　株式会社　桃源社

(分) 0093 (製) 274008 (出) 5180

1975 ©

曾野綾子作品選集

爽やかな声・目次

爽やかな声 7
宇宙に浮游する 28
仏を攫う 44
三人の妻への便り 60
隠された顔 79
蛇と午睡 91
暁の水葬 108
星と魚の恋物語 125

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

甘酸っぱい部屋 161
雪に埋もれていた物語 180
泥川の杭 225
雨の匂い 224
落葉の声 238
猫の家 250
解説　鶴羽伸子 279

装幀　原　弘

曾野綾子作品選集

爽やかな声

爽やかな声

1

志賀桂子が、初めて空から見たタイの大地は、途方もなくまっ平らな、泥色の平面であった。どこにも岡一つない。所々に巨大な鏡の破片が落ちているように見えるのは、掘割りと呼ばれる水路であった。

これが印度支那半島の素顔なのか、と志賀桂子は思った。つい先刻、彼女はダナンの上空で、はるか下方にジェット戦闘機の、銀色に光る機影を見た。通路を通りかかったスチュワードが、

「あそこに、アメリカの戦闘機が見えます」

と教えてくれたので、桂子ははっとしたのだが、

「日本の飛行機は、大丈夫です」

と相手は桂子の心配を素早く察して笑った。

「ほら、一平太ちゃん、真菜ちゃん。ベトナムでは戦争してるのよ」

桂子はそう言って六歳の息子と四歳の娘にも、この只ならぬ燃えている印度支那半島の光景を覚えておかせたいと思ったのだが、真菜はちらと窓を見るなり、

「あ、かっくいい！」

と叫び、兄の一平太は、

「ばかやろ。かっくなんかよかねえや」

といきなり妹の頭に、パンチをくらわせた。

ここで妹が泣きでもすれば、却って恰好もつくのだろうだ、強い真菜は泣くどころか、いきなり兄の二の腕に噛みついたのだ。

「痛い、痛いよう。ママ、もうマナなんかにメロンなんか食べさしてやらないで。今度、メロン出たら、僕一人で一個食べるからね。僕、一生に一度でいいから、メロン、一人で一個食べてみたいの」

突然、一平太の訴えは家庭内のことになって来て、桂子はまことにきまりが悪かった。親子は、エコノミイ・クラスの最前列にいて、廻りの人々も、ほとんどは聞いていても聞えぬふりをしてくれているのだが、それでも、斜後の席にいる若いBGらしい二人連れの女の子たちが、くすっと笑ったのが、桂子の耳に入った。

すると真菜はそこを通りかかったスチュワーデスをつかまえて、メロンからの連想なのだろう、

「あのね、先刻、ご飯の時に出た、お林檎残ってる？　残ってるなら頂戴。真菜もっと食べたい」
と止めるヒマもあらばこそ、この図々しい、生命力の旺盛な娘は、さっさとスチュワーデスについて行ってしまう。この分ではチョコレート一枚で人攫にもついて行くだろう、と桂子は溜息をつきたくなる。
その長い旅もやっと終りに近づいたのだ。
飛行機はぐんぐん高度を下げて、金色の寺が椰子林の間に七宝細工のような輝きを見せて浮かび上って来る。会社からバンコック勤務を命じられて一足先に赴任していた夫との十カ月ぶりの再会ももうすぐだ。
飛行機は弾むように、着陸する。飛行場の建物のバルコニーに、鮮かな黄衣の僧の姿が見える。桂子は夫の姿を探したが、それらしい人影は見えなかった。
やがてタラップがつけられて人々は座席を立った。スチュワーデスが、この小さい客には特別に笑顔を見せる。
「また、飛行機に乗ってね」
と言われると、一平太と真菜はうんと大人しく頷いた。
外へ出ると、途端に、ドライヤーの中に入ったような凄じい熱気。今は三月なのに、飛行場のアスファルトは溶けて、黒光りしている。
「ママ、暑いよう。暑くて死んじまうよう」
真菜がいう。
「黙りなさい。誰も死んでないでしょう」
「ねえ、ママ、バナナいつ買ってくれるの？　日本じゃバナナ高くて買えないけど、タイへ着いたら、バナナいくらでも買ってくれるって言ったじゃないの」
一平太がいう。
「わかったわよ。とにかく、今日おうちに落ち着いたらね」
一刻も早く空港の建物へ入りたい、と、めくるめくような陽の下で桂子は思った。
がらんとした天井の高い空港の建物には冷房もない。金ピカの徽章をやたらにつけた役人が、痩せた黒い顔に眼だけ光らしている。彼らの臀は、小児の如く小さく、そのズボンは棒のように細い。
「志賀さんでいらっしゃいますか」
桂子が、順番を待っていると、飛行機会社の日本人の職員が声をかけてくれた。
「手続き、お手伝いいたします。御主人は税関を出たところでお待ちでございますから」
パパ、パパと子供たちが騒いだ。タイ人の入国管理官は初めて、飛行機会社の職員に笑顔をむける。彼らは日本人

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

から常に、ライター、ラジオ、真珠などの贈物を貰っているのだ。

荷物の検査も済んでやがて、親子が青い色ガラスの自動ドアを出ると、素早く、「ようこそ、いらっしゃいませ」と桂子の前に躍り出た若い男がいた。夫の部下の寺井という青年だった。その後に、桂子は夫の志賀巧の姿を見た。

夫はアロハを着て、サングラスをかけている。少し太ったようだ。一平太と真菜が両側からとりついている頭を撫でながら、桂子は、夫が顔色が悪いのではないかと思った。しかし、陽やけの故でそう思えるのかも知れない。

「疲れたろう」

夫は言った。

「ええ、少しね。一平太と真菜があばれるんですもの」

そう答えながら、桂子は、疲れているのは夫の巧のほうではないか、と心の中で思っていた。

桂子は特に、夫婦の再会を劇的なものだと期待していた訳ではなかったが、それにしても夫と会うということは、こんなことだったかと少し意外だった。一家は空港からその儘、市内の冷房の行き届いた「シャングリラー」という北京料理屋へ行き、そこへ寺井をも含めた夫の部下数人も加わって早目の夕食を摂った。どっちみち、家へ帰っても、すぐに夕食の支度をする訳にも行かないのなら、外で食事を済ませ旁々、巧が部下を引き合わせようとしたのも頷けた。彼らは志賀次長が夫人が来るに当たって、新たに借りた家の設営のために多かれ少なかれ働いたのだから、夕食ぐらい奢られても当然であったし、桂子もあらかじめその経緯を知らされていたから、彼らに感謝の言葉を述べられる機会があることはありがたいと考えていた。

しかし、さすがに子供たちも、食べづめの飛行機旅行から下りた直後では食欲もなく、一平太は、「チキンライスがなきゃいやだ」とだだをこね、真菜は「スパゲッティなら食べる」と只、親を困らせるためだけを目的にしたような文句をつけた。そして、二人は食事の間中、悪ふざけをして、テーブルの廻りを駆けめぐり、間もなく眠いと言い始めた。

「じゃ、後は皆でゆっくりやってくれ給え、僕らは子供もいることだし、女房も疲れていると思うから、一足先へ帰る」

巧はそう言うと、老酒で赤くなった顔で立ち上った。彼は家まで送って来るという寺井を無理に退けた。

外はまだ夜にも拘らず、少しも涼しくなってはいなかった。車は巧がバンコックへ来てから買ったという国産車で、車内にはシートからも壁からも、まだ新らしい材質の匂いがぷんぷんしていた。

「お酒を飲んで運転して、大丈夫なの？」
それが夫婦の間に交わされた初めての夫婦らしい言葉だった。
「大丈夫だよ。捕ったら、おまわりに少し握らせりゃいいんだ」
そんなことではない。危険はないか、ということなのだ。
「酒量が大分上ったの？」
「少しはね。こんな所へ来て、飲みでもしなければ、気が紛れないこともあるしね」
車は、夢の中の風景のような町の中をかなり長いこと走った。夜はねっとりと暑く風もなかった。男たちの白いYシャツは、蛾のように見える。黒いズボンと上着を着た中国人の老婆が、歩道に椅子を出して悠久の時の流れの中で涼んでいる。
「もし一人で、町へ出て、家へ帰るとき、わからなくなっら困るわね」
子供たちが後の座席でお互いに寄りかかって眠ってしまったらしい気配を感じながら、桂子は言った。
「シ・アユトウヤ（アユタヤ通り）・クライ・クライ・ピヤタイ・ポリ（ピヤタイ警察の近く）と言えばいいんだ。ほら、ここがその警察だ」
彼は、そう言いながらまっ暗い住宅地の間の道へ車を乗り入れたが、警察自体が闇の中で眠っているように、あまり目立たなかった。車はそれから森のような鬱蒼とした繁みの間の道を走ると、石の門の奥に、赤いほの暗い灯を見せた古めかしい洋館の中へ入って行った。
玄関のテラスに、一人の影のような女が現われた。
「女中のヌアンだ」
巧は言った。ヌアンはタイ風に両手を合掌して、新らしい女主人を迎えた。そして桂子がふと、足許を見ると、ヌアンの派手な花模様のサロンの下には、異様に白い爪の浮き出た裸足が、心地よげに石のテラスをがっしりと踏んでいた。
「とにかく、子供たちを寝かせますから、寝室にスーツケースを運ぶように、ヌアンに言って下さらない」
二階の子供たちの寝室は、十六畳ぐらいの大きさだった。真菜は眠がって泣きべそをかいていた。
「ほら、早くおしっこに行ってらっしゃい。そうしたらお寝巻を着かえさせてあげますから」
桂子は、二人がとてももう風呂へ入る気力など持っていないと見て言った。
何かにつけてすばしっこい真菜が、ヌアンに教えられて風呂場へ行って来ると、手早く寝巻を着て、大きなベッド

の一つに、すとんと横になると、もうすやすや寝入っていた。

一平太の方はそうはいかなかった。彼は風呂場から出て来ると、少しばかり眼が覚めたようにもじもじとあたりを見廻した。

「大きな家だね」

日本ではアパートに暮していたので、彼は言った。

「そう、大きいでしょう」

桂子は、一平太にパジャマのズボンをはかせながら言った。

「だけど、薄気味悪い家だね」

「そんなことはないわ。電球が少し小さいのよ。明日、パパに変えて頂きましょう」

「何だか、幽霊の出そうな家だよ」

「まさか」

「ママ、僕が眠るまで、ここにいて」

一平太は少し恥かしそうに、少し済まなさそうに言った。

「いいわよ」

一平太がベッドの上に横になってから、桂子はほっとして、脱ぎ捨てられたものをきちんと畳みながらあたりを見廻した。

天井の高いがらんとした部屋だった。ベッドの上には掛けものひとつない。事実このむし暑さでは、裸で寝ないだけでも暑すぎるくらいなのだ。部屋の隅に傷だらけの大きな洋服箪笥がある他は、何の家具らしいものもない。

桂子は窓のところへ行ってその構造を調べた。鎧戸と網戸がある。掛金の具合を調べようとすると、かさっと無気味に動くものがあった。守宮(ジンチョ)なのだ。ふと見上げると天井にも三匹ほど、長さ十糎ほどのがへばり着いている。虫を食べるだけで、人間には何の危害も加えない、ときいてはいたが、桂子は思わずはっと手を引っこめた。

それから、彼女はもう一度子供たちの寝姿を見つめてから、夫とさし向かいになるために階下の居間の方へ下りて行った。

2

夫は三十畳近くもありそうな居間の籐の長椅子に寝そべって英字新聞を読んでいた。桂子はその傍に坐ったが、夫は気づいていないのか、それともよほどおもしろい記事があるので、気づいていないふりをしているのか黙っていた。

「その後、どうだったの?」

たまりかねて、桂子は尋ねた。

「どうってこともないさ」
巧はやっと新聞を置いて答えた。
「引っ越し大変だったんでしょう」
「いや、寺井がまめな男だから……ヌアンを探して来てくれたのもあいつなんだ。もう一人、裏の女中部屋に、ヌアンの従妹というメエという子がいる」
「そう」
「お茶を持って来させようか。冷した日本茶を」
「いいえ、結構」
桂子はそう答えてから、巧が再び新聞を読みそうになるのを、押えるように言った。
「子供たちは寝たわよ。蚊帳はいらないの？」
「二階はいらないと思う」
「一平太ったら、この家、幽霊屋敷みたいだね、なんて言うのよ。あんな広い部屋に寝たことないからなのね」
桂子はそれを決して巧への嫌味で言ったつもりではなかった。日本での若いまともなサラリーマン夫婦は、子供を十何畳もある寝室に寝かせられないのは、当たり前なのだから。しかし巧は急に顔色を変えた。
「お前がそう言ったからなんじゃないか。住むなら多少古くさくても、タイらしい家がいいって。第一、お前たちの望むような、ハリウッド・スタイルの完全冷房のアパートのフラットを借りたら、もっとずっと狭くてしかも金がかかる」
「決して不服じゃないのよ」
桂子はそう言いながら、夫はどこか変わった、と思った。暑さで体の具合が悪いのだろうか。いずれにせよ、再会は甘さどころか無残な姿で、夫婦の上に降りかかって来たのだ。

風土が人間の精神状態を規定する厳しさを、間もなく桂子はひしひしと味わうようになった。雨季が来れば違うというのだが、とにかく、一日中何という濃密な暑さだろう。冷房などなくても、せっかくの外地住まいを広々とした一戸建ちの家でと希ったのは、あるいはまちがいだったかも知れない、と桂子は考えるようになった。年間平均気温が三十度近いというこの大都市では、人間的に暮らすということは広い家に住むことではなく、狭くとも涼しさの中で、思考が可能だという状態を作ることかも知れなかったのである。巧も桂子も暑さには強い方だったし、巧は十カ月の生活で、もうここの気候には馴れていると言い、冷房なしの生活を決して不満だと言っている訳ではなかったが、桂子はその代わりに夫が内面から壊れて来ているように思った。

東京にいた頃の夫は、かたい本もよく読み、こまめで、人の気をそらさないところがあった。それがここでは、家へ帰ると、夫はひたすら籐椅子に寝そべって、新聞か、市内にできた日本のデパートで高い値段で買って来た新書判の本を読んでいる。新書判といっても、それらはスリラーか、エロティックな話がたっぷりサービスされた風俗小説で、昔のように、専門書で勉強するということは考えられない。第一、巧は、酒が強くなり、桂子が、「あなたアル中の第一歩ね」と言ったほど、いつもウイスキーのグラスを手にしていた。

わからないのではないのだ。扇風機だけが頼りの暑い暑いビロードの手ざわりの夜には、何もすることがない。テレビを見てもタイ語ばかり。数千人の日本人商社員たちは多いようでいて、実はどこかに繋がりがあり、心を許してつき合うという訳にもいかない。ゴルフも暑いばかり。料理には、青くさいココナツミルクや、莞茜(パクチー)と呼ばれる強烈な臭気を持つ三つ葉のようなものや、人間の食べものとも思われぬ火のつくような唐がらしがぶちこまれていることが多い。ステーキの牛肉は水牛でウマヤの匂いがしたし、バターは一流料理店でも腐敗していて酸っぱいようなのを平気で持ってくる。水は蛇口から飲める訳でなく、毎日毎日ポラリスという水会社が壜詰めの水を配達して来るのだ。たまに日本映画が上映されることがあるが、そうなれば、映画館は、あっちを向いてもこっちを向いても、顔見知りばかりで、お辞儀しているだけで頭が痛くなってくる。麻雀は国禁だから、やるには覚悟がいり、リングに這いつくばって祈りを捧げてから始まるタイ・ボクシングは全く生ぬるくパンチがきかない。この土地では何もする気は起らぬ。恐らくここでは仲の悪い夫婦も、姦通することはあり得ても、離婚するだけの気力はないに違いない。その中で、幕末の英国の外交官アーネスト・サトウは「一外交官の見た明治維新」という立派なレポートの初めの部分を、このバンコックで書き出したのだ！　何という気力だろう！

勿論、桂子には楽しいこともないではなかったのだ。何よりもここは空気が瑞々しい。朝おきると、小鳥の声が、怠惰にほほ笑んでいるような透明な朝陽と木々の繁みを通して響いて来る。そして、町には貧しい人々が溢れているとは言っても、彼らの顔は明かるい。その高床式の水上家屋風の床下は、いわゆる汚い湿地のような水溜りなのだが、そこに泳いでいるのはグッピイなのだ！

二人の女中、ヌアンとメエは、色の黒いモン族だが、よく働いて仕事も手早い。ヌアンが食事の責任者で、メエが洗濯、掃除を受け持つ。東京の社宅のアパートで、二人の子供たちの衣類の洗濯から一切をきりまわしていた桂子に

とってみれば、天国のような境地である。ただし、夫の黒い噂を聞かなければの話だが……。

妻の本能のようなもので、夫には女がいたらしい、とわかったのは、数日後のことであった。巧は正直で、嘘をつくのが上手ではない。ひとり暮らしをしていた頃、毎晩どこで何をしていたか、というような話になると、何となく話の脈絡に欠けるところができてしまうのである。自分の遊びではなく、招待でよくナイト・クラブにも行ったというから、そこの女とでも、深入りしたのであろう。桂子は嫌な気はしたが、大騒ぎを引き起してまで、そのことで夫をとっちめようとは思わなかった。

しかし問題は、それだけではなかった。巧は日本にいた頃とはうって変って暗く、苛々していた。表向きに聞きただせば、彼はそのことをこの国での商売がしづらい故にするし、第一、それはもっともなことであろう。巧の勤めている船会社は、ヤワラという下町の中心に支店のオフィスを持っていたが、支店ができてまだ日が浅いので、この国の不思議な官僚機構に未だに悩み続けていた。官庁であるならば、表向きから書類を出せば、正しく受理されるのが道理であり、それが何らかの理由でうまくなされない時には、役所は責任をもってそれを調査すべきだというふうに日本人は考えるのだった。そのような条理が通らない時には、日本人はそれらをただちに、タイの官僚制度の腐敗であり、タイ人の道徳心の欠如であるというふうに考えた。しかしそれは、日本人がアジアを知らなさすぎたのだ。

この国では賄賂が、いわば一つのシステムなのであった。それは日本人が、内心断わることに決めながら口では「考えておきましょう」というのと同じ、習慣的な優しさであり、社会的な心の通わせ方であり、組織の運営に欠くべからざる潤滑油なのであった。

日本人たちは誰もがこのような、もっともアジア的な泥沼の中で、何とかして足がかりを作ろうと焦ったのだ。それは一種の心理的ゲリラ戦であった。

夫がそのような戦いに疲れ果てたことはよくわかる。しかし、彼の神経は疲れているというより、何かを怖れていると桂子が感じ出したのは、間もなくであった。

ある朝、夫は一旦食卓についてから、また、思いついて二階へ上った。桂子は台所で日本茶を入れて、食卓のところまで持って来ると、夫は、固い蒼ざめた表情で、砂糖壺のプラスチックの蓋を仔細に検査しているのだった。

「桂子、今、砂糖壺をいじった？」

巧は乾いた声で尋ねた。

「いいえ。どうして？」

「蓋の上に水滴がついてるんだ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com